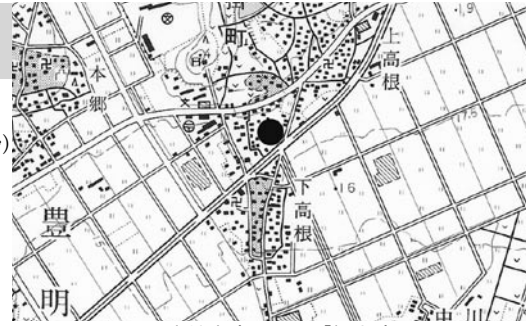


やくしがね
薬師ヶ根遺跡

所在地 豊明市沓掛町
(北緯 35 度 04 分 00 秒 東経 137 度 01 分 46 秒)
調査理由 道路改築工事 (一) 春木沓掛線
調査期間 平成 18 年 8 月～10 月
調査面積 750 m²
担当者 池本正明・永井邦仁



調査地点 (1/2.5万「知立」)

調査の経過 発掘調査は、県道春木沓掛線改築工事の事前調査として、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。道路が県道 57 号線と交差する地点および側道部分が調査対象地となった。当該遺跡は、平成 9 年に豊明市教育委員会によって試掘調査が行なわれており、調査対象地点には須恵器～灰釉陶器の窯もしくは灰原が想定されていた (森前 1 号窯跡)。しかしながら調査の結果、須恵器窯跡は存在せず、古代から中世の集落が展開していたことが明らかになった。

立地と環境 遺跡は名古屋市南東部の丘陵が境川に向かって下る斜面地端部に立地し、現況では県道 57 号線から西側が住宅地と畑、東側が水田となっている。付近一帯の丘陵には大小の谷が入り込むため、その端部は細い尾根となつてのびる。それらには「根」を含む地名が付され、薬師ヶ根もそのひとつである。なお、遺跡は字薬師ヶ根から北畑、森前までに広がるとみられ、標高約 16～19m の範囲となる。標高約 15m 以下は埋没谷となり、長らく湿地となつていたらしく、今回の調査区においては居住地としての土地利用はなかったことが確認された。

調査の概要 調査開始時、須恵器窯跡が想定されていた地点 (先述) には、小山状の高まりがあり旧地形および窯跡の一部が残存しているものと思われた。しかし調査の初期段階にて、この高まりはごく最近の土盛りであつて、その下に緩い傾斜面の存在することが判明した。この傾斜面に広がる遺物包含層は近代までの畑耕作土で、この下にひろがる白色小礫混じりの橙色シルト層 (以下、地山) にて遺構検出を行なった。

遺構検出の結果、平安時代と鎌倉時代～室町時代前半の集落、江戸時代の井戸 (029SE) が確認された。これらの遺構以外では、大量に廃棄された須恵器の二次堆積 (186SX) が特記される。

須恵器の大量廃棄 186SX は標高 17m 前後の地山などを直線的に切り込む削平の痕跡で、そこに堆積した土にコンテナ約 10 箱分の須恵器と若干の灰釉陶器・山茶碗が含まれていた。この削平そのものは比較的新しく、中世の溝 (187SD、後述) の堆積層を切り込んでおり、井戸 (029SE) に先行することが遺構の重複関係から判明した。耕作による削平と推定されるが、遺物破片が 5cm 四方以上あるものが多い点は通常の耕作土からの出土状況とは異なる。

須恵器は蓋・杯 (有台・無台)、碗、有台盤、高盤、長頸瓶、短頸壺、こね鉢、大甕などがある。時期は折戸 10 号窯式期にほぼ限定されようである。この中には蓋と長頸瓶の頸部が融着したものが 1 点、焼台に使用された可能性のある大甕破片 1 点がある以外は、窯跡出土遺物に多い融着・変形品はほとんどみられなかった。ただ、杯や盤のなかには釉の飛沫が付着したのものがあるなど、何らかの基準から外れた「不良品」が含まれる。この須恵器群については、窯出しされた製品を運んできて二次選別した後に廃棄された

ものと考えられる。最近の調査事例では日進市金萩遺跡が挙げられる。

しかし、選別のための施設など当該期の明確な遺構は確認できなかった。須恵器は186SX以外にも中世の溝(187SD)などからも多く出土し、その位置からすると施設はより高所にあったことをうかがわせる。

平安時代の 竪穴建物

186SXが切り込む遺構群のひとつに平安時代と推定される竪穴建物跡群がある。一辺が3m規模の小さなものが、狭い範囲で重複する。覆土が地山土に近い暗褐色シルトが大部分であり、遺構として疑わしい部分もあったが、折戸10号窯式期の須恵器やそこからやや時期の下る灰釉陶器がわずかながら出土したことから比較的短期間の使用と埋め戻しのサイクルで建物があったと判ぜられた。火処はなく、土器以外に顕著な遺物がない。

山茶碗窯跡 の存在

調査区北西部の攪乱で山茶碗が重ね焼きの状態出土した。時期は13世紀代とみられ、今回の調査区内では溝が掘られ掘立柱建物が造られる時期でもあり、背後の丘陵地にもその存在を想定するのは難しい。ただ、遺跡の南東には山茶碗窯と推定される下高根1～3号窯跡が存在する(既に滅失か)。ここから移動してきたと考えられる。

中世の溝と 建物

299SD・279SD(上層が141SD)・187SDの溝は、出土する遺物から13～15世紀と考えられる。299SDは屈曲部に袋状の深い箇所があり、側壁を大きく抉り込む。底部近くでは粗砂とシルトの交互堆積となっており、溜井の機能があったと考えられる。またその周囲には小ピットが集中しており、覆屋根があったのかもしれない。次に279SDであるが、ここからは古瀬戸前期様式後半～中期様式期の四耳壺や常滑産甕などの破片が多数出土した。また青磁片数点も出土している。遺物の時期は13世紀後半から14世紀代とみられる。187SDでは186SX同様須恵器が多く出土したが、年代下限は中世である。これらの溝は一定の距離をおいており、また279SDと187SDの間には1間×2～3間程度の掘立柱建物が想定されることから、屋敷地となっていた可能性が考えられる。

187SDの脇では竪穴建物跡が確認された(184SB・185SB)。底面で柱穴は検出されず、底面近くの覆土中から古銭(北宋銭)や土師質羽付鍋が出土した。また、底面では炭化物が目立ち、鉄滓も若干出土した。いずれも建物廃絶後の廃棄によるものと考えられるが、付近に鉄鍛冶施設があったことを示すものであり、注目される。

戦国時代以 降溝と井戸

134SDは一見中世前半の溝群に類似するが、覆土が全く異なり戦国時代以降の遺物がみられることから、比較的新しいものと考えられる。また029SEは187SD埋没後に掘られた井戸である。素掘りで深さは約3m、井戸枠などの構造物はなかった。時期を示す出土遺物はなく、遺構の重複関係などから江戸時代以降のものと推定した。

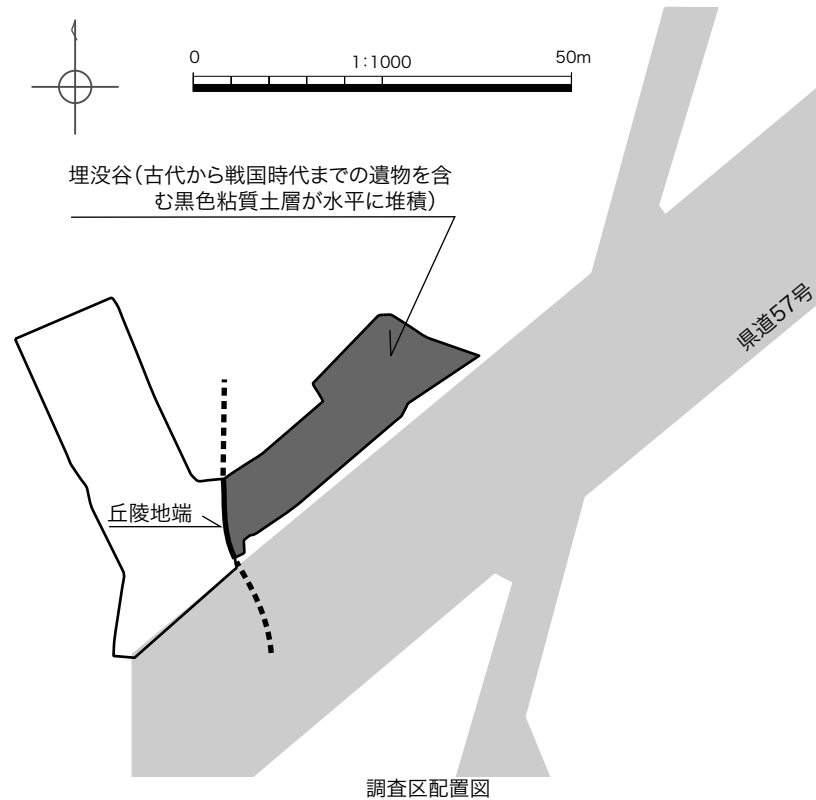
遺跡の特徴

薬師ヶ根遺跡周辺の丘陵地は、猿投窯の一支群として8世紀中葉(鳴海32号窯式期)以降に須恵器窯が、そして9世紀以降に灰釉陶器窯が増加する。そこから他地域への製品搬出ルートは現・境川に相当する河川が考えられる。薬師ヶ根遺跡から北西には山新田窯跡や勅使池窯跡などが確認されており、ここから若王子川などの小河川を通じて境川のある低地へと製品を移動させたとする、当該遺跡の付近を通過したことになる。このような遺跡立地は当該遺跡の須恵器出土状況を理解するうえで重要である。

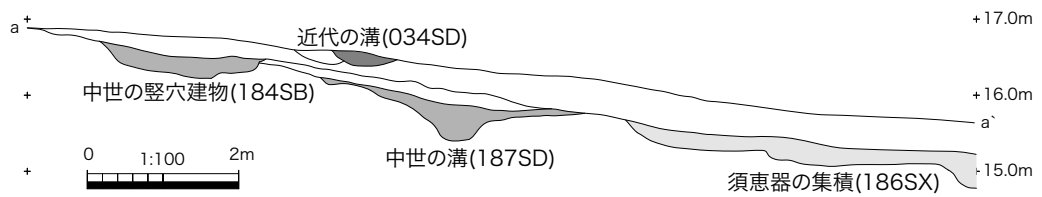
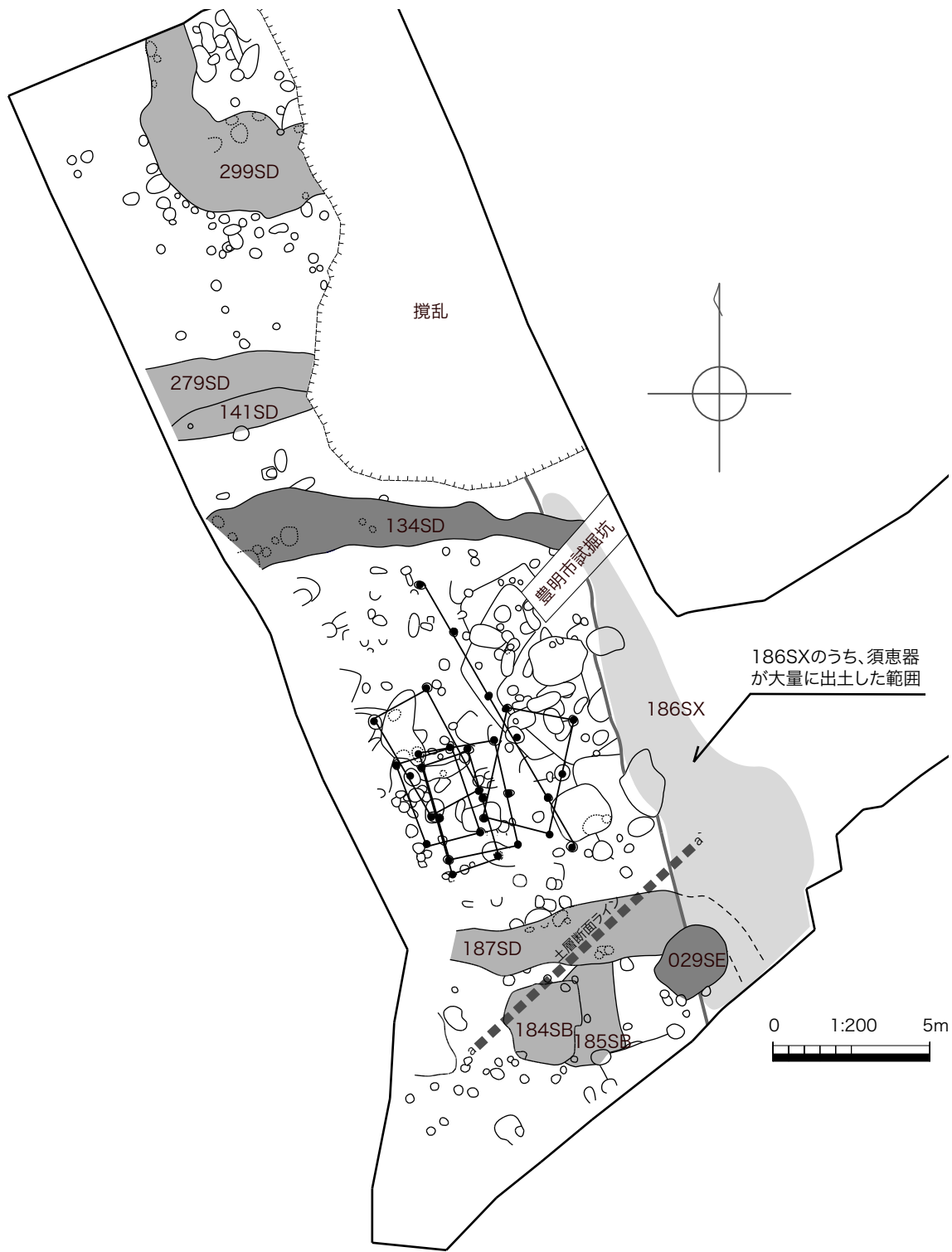
中世の遺構・遺物については、遺跡西方約0.6kmに位置する杓掛城跡で確認された遺構・遺物の時期よりさかのぼる点が注目される。そして逆に杓掛城は16世紀代に機能した城郭であるが、薬師ヶ根遺跡では当該期のまとまった遺構・遺物を見いだすことができない点も重視されよう。前者については、文献史料の少ない境川流域の中世前半の動向の

一端をつかむ好資料になるものと思われる。また後者については、戦国時代における集落の移転を想定する向きもあろう。

ところで当該遺跡北方約0.4kmには、奈良時代の平城宮跡出土瓦と類似文様の軒丸瓦などが出土した上高根行者堂遺跡がある。ここに奈良時代東海道の両村駅を想定する見解もあり、南北方向に伸びる古道もある。古道は当該遺跡の脇を通り下高根の集落へと南下するが、今回の調査範囲の中では古代東海道と呼びうる道路遺構は確認されなかった。(永井邦仁)



調査区(丘陵上の遺構)全景(北東から)



調査区（丘陵上の遺構）全体図と土層断面図